

5  
4400





4400

門 5  
4400  
巻

幻窓湖中編輯

芭蕉翁略傳

東都書肆 萬笈堂梓

昭和九年九月九日購求

芭蕉翁像破墨圖

吉島模寫



芭蕉翁

乃心此也

芭蕉翁の像は

芭蕉翁の

芭蕉翁の

芭蕉翁也









御縁にちうねるまゝしちかきとまの申はか  
 母すれい名ゆに後著し利害に束縛を  
 身しぬれぬまゝすまゝいなるにたあは  
 かくし、祖の神しをせうれまゝいんせり  
 けちぬしやりの交野菓子今あまのひとし  
 ちされやうなまゝのうのい南はまゝ  
 まりのまゝまをこしなまゝ今、禁風のま  
 なぶうあゝのいまゝのちあめいあゝまゝい

後まればあゝいんまゝなりまゝいん  
 ぬちまゝあゝまゝに祖翁略傳をいれらるゝ  
 まゝまゝせまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
 しんまゝまゝまゝまゝの御伊を幻の  
 ありし御中子うまにけりし能林にまゝ入  
 証を在まゝまゝまゝまゝの信しつれ  
 まゝまゝ法抄よまゝまゝまゝに此口碑をま  
 しんまゝまゝまゝまゝの麻、底にまゝまゝ



わのたまを たけと せんまのくまのくま  
きるきるのくまのくまをきりくまのくま  
又きりくまのくまのくまをきりくまのくま  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
きりくまのくまのくまをきりくまのくま  
くまのくまのくまのくまをきりくまのくま  
くまのくまのくまのくまをきりくまのくま

僕等集いぬる天保十年甲戌つと  
歴のたけりくまのくまのくまのくまのくま  
かへに祠事ありことを言改のたけのくま  
神詔伯た二位次是延王をきりくまのくま  
桃青雲神のくまのくまのくまのくまのくま  
くまのくまのくまのくまのくまのくまのくま  
きりくまのくまのくまのくまのくまのくまのくま  
敗壞あか—きりくまのくまのくまのくまのくま  
とに補修をくまのくまのくまのくまのくまのくま



せふよー標ふにまゝーぬ又かゝるに  
碑ありその碑に曰

平子て出たてハ平垣連可のを甲斐の湯打の社  
さいう心を付くー良山枕を西三浦のいかり  
永く風流のまを成す後ーぬふ

重石子

今よりあてぬまゝ

れつてぬれー枯尾也

芭蕉翁畧傳

常陽 幻窓湖中 編輯  
西巻野巢 校合

芭蕉菴桃青翁を伊賀國阿拜郡柘植村の人也平士彌守忠清常清の

苗裔

其類同郷と姓とを以て柘植氏松尾氏福地氏也  
宗漢の苗裔の姓と存す存する者ありは伊賀也

松尾儀左衛門と云今三字有長

次典左衛門

伝云は伊賀守(伊賀守)也  
如母芭蕉山僧の兄と伝ふ長に次也

と云同國上野赤坂町に手蹟あり

範云家業とて次と云左衛門命清と云菴堂殿一説  
長基の兄也六

則芭蕉翁也

正保元 甲申歳生を修ひて幼名を松尾守七

一説基七郎  
又稱金化

後改定て忠左衛門







と書し經冊也宗房之宅地也及重頼と即中屋敷城東より之良精社  
 后兄才九郎の墓あり也 其墓の傍に有る 孫才八隣家多し今河合何其後  
 る宗房は旧宅あり

芭蕉翁の傳記曰はば良忠の子息は長弟と云たりと宗房二好く忠と書し家と傳しむるは  
 續棟梁隱也傳才之芭蕉翁は任村之弟而有忠勳云宗房は村家八郎の玄孫也と云ふは  
 才一の流よりと在京七年拾穂軒季吟小遊學也

元禄二年加賀小枝の消息は此流に御ありと云ふ其時年廿五才と云ふ是良忠八  
 季吟の流より才一の流に御ありと云ふは才一の流に御ありと云ふ

以頃東山の麓に舟泊船を桃青と号す 宗房法所又約月軒  
宗房の墓と云ふ

寛文十二壬子 行年 廿九 九月始て東武に下小石川水植之功と殘也

風俗文選云初宗房は為遠切修武小石川水植四年成建切而八源川芭蕉翁出家二十七年  
 芭蕉翁小石川水植之功と殘也といふは宗房の流に御ありと云ふは宗房の流に御ありと云ふ  
 同くといふは宗房の流に御ありと云ふは宗房の流に御ありと云ふは宗房の流に御ありと云ふ  
 松尾宗房は村家八郎の玄孫也と云ふは宗房の流に御ありと云ふは宗房の流に御ありと云ふ

みくろの流に御ありと云ふ

宗房の流に御ありと云ふ

りこの流に御ありと云ふ





かりて水種の間とほしなるものれをいふ位解印清は生をいふとて今六一既食事と得ぬ  
大は九才とて京都より三十一才ありて藤原の治小其百二才也也信云考ふるなりし

延宝元 癸丑 行年 同 一 甲寅 行年 一の葉雜葉一結の風庭坊又 号松抄子 志一斎 といふ

松尾 佐右衛門屋敷松尾の号 梅茶屋松尾時世才 志厚 一 深川之居を結ひて今お久川人葉芭蕉一様を裁

たを松植とく先ゆくむ秋の二葉うれ

紫葉まるとるや人味く芭蕉之居と云

同 乙卯 行年 同 四 丙辰 行年 同 五 丁巳 行年 一の春二る顔あり同之冷冬を同ふ

の春まてにふるは戸之冷と云

あゝ何ともあやめあふれとて追く飯と汁

六月廿日以初めて伊賀の宿敷同林又東武に申致

同 六 戌年 行年 同 七 己未 行年



同六 阿蒙池と花より 春より馬と鶴

同八 庚申 行年 廿七 初夏門人二十款仙阿と同林田舎句合常盤屋句合 其前 廿九

天和元 辛酉 行年 廿八 同二 壬戌 行年 廿九 同三 癸亥 行年 四十

和其前 菅菅句 其前号菅菅句又螺舎成程而堂 本姓は室井氏也板本氏母方の姓

於此に我れめ一 常をこころり

一説は貞享二年南の大海を 舟りあはせし句と云

憂方知酒聖貧始覺錢神といふ白居易句を前して

花より此世我は酒志ろく言くは

此年北条深川の草庵急火の如しんれ始あやろくし 漸くひたし 遂に 灰もきて煙の中にしきのむ信ひたり 是そ玉の緒のはるきけり ぬり

爰猶如火宅の憂を悟りて 不任の心を盡して 其次の年佛頂和尚 臨川

の如く祖五年と云 甲物は唐より佛頂和尚は 住古所なるもはを 其情にて甲斐よりかの

古祖の家より祖五年に及んで遊まれとて

自言云甲斐の國郡用と云ふに 遠甲は昔 なるは 我を修しん 我を修しん

一説は甲斐の郡用名村と初唐村なる處是とて 其年一より初唐村普力山多福寺と云ふ 翁の古き一物多あり又初唐村は初唐村なりしと云ふ 深川の唐院の傳かの傳は件一説より 添ふとて 初唐村と云ふ一ありしと云ふ 其年一より初唐村普力山多福寺と云ふ

其年深川の唐院におはしけり 人悦く 悦原の回竹と巻と信ひし 見も

心ゆく 海に詠もとて 世に一林と載たり

貞享元 甲子 天和四月 九日改元 深川在唐 行年 四十一

其年や新年あり 多末み井



秋八月古郷を越る千里

俗名油屋同郷と云  
是時の事と記す申す紀行書に  
紀行或は芋切と云

野々々々々を心よ風の志むるれ

秋十と世却て江戸を去る古郷

東海道をゆくお根と越く

霧時雨ふこを足ぬきおのりるき

富士川

吉原と備  
原より

の遠小橋子を憐れおひて

積とたぐ人控手に枯れ風いさなり

る上の風冷

道行くこの木槿とるる霞まろり

小夜の中いさ

馬よおて残夢月遠く春の煙り

伊勢行て松葉屋風瀑

実ハ伊賀の人  
は伊勢おき

城居て十日たこのと足せと

焚火の光信

みそら月あ〜〜と春の秋と抱あじ

西行者の麓を道

芋流よ女西刈あ〜秋よ春

ま〜と山田の雷枝を訪る早くも春霞とつゆ〜

霜まわ〜と西行あ〜秋れ春

雷枝

と世流と春よ風の破き

といふ挨拶あり其夜〜とた〜又の日岩山を訪り



師の構むのし拾ん本乃桑うん 塔山

さくたゝゝおれは後四十一

とて入換好あり或茶店昼休しあひけるふ家女料紙取持せり  
さうりく彩ひ侍りしと書付給ふ

茶は香や燦乃翔たよりのす

田人庵牧を訪く

茗植く竹回子本はありしり

長月の始古たの海あり 此の伊賀の書名屋と云ふ  
後再形房より人を見たり 亡母の白髪を撫て

手もくくく消人涙そ何つき林乃霜

又旧里を去く大和起き茗下郡竹の岡とてふ子里と古くもまぬ

日頃とてまると旅然と着ひぬ

綿弓や程巻くぬくむ竹のおく

二上山尚麻寺 又祥林寺と云用明帝第四  
皇子麻呂古教互達立たり 法て庵一の松を見たり

大さ生枝かくすさかい之をれと云ひて

僧あさか不い死うのる法のまの

芳野より坊 本花院南湯院あり  
いふ薬草ありあり に舎りとのむ

礎打く我り一閑せよ坊々あ

西行の旧記とくくは清おを尋く

流とくく試し浮世もくかもや

奥は流よ分く後院破席の法をね



津那手と程く志のふ何と志のふ何

大和の山城と程く近江路ふ入る處と程く今頃山中城造り

義朝のちかふふ仙たり河きり風

不破をさしして

秋風や霧も烟も不破あり関

樽瀬川の本園 昔は樽瀬川の 家とさしして武蔵郡の根茎を軟くひ

死もさぬ根 痛のさしてふあはのさ

は時大垣の必新 荆は 大垣の古家時氏には新川と云ふは父 入山は時必新を招き

霜をさき根 痛ふ 懶を着せり 如新

古人よりやうね 根の本かりし

とやふ根あり尾州に程く相葉 林 の家ありまにまは程く深切まは程く

は海より草 程く程く程く

柳をの満るたまふと人にいさあをれあひて

海をさして鴨のさき海のこふあ

熱田の宿ありふ 社改頼破あり

志のふさく程く程かふ舎りふ

名護屋入 其長途の雨海を程か紙を海に程か程かふあふとあふあ

あふりしの身ハ竹のあふあたるふ程

は時御宿大新松有 左山の抱月亭を程か程かひ

市人よりさきさうらん雪に程



十二月八日一斗亭饒清有

旅ありし一おを所乞乃夕月夜

又野州杖と身く葉名の本統寺古益亭を遊びて

冬牡丹子多よ堂はかよと燈

州の杖と柄巻く深の方と立ぬき

あけなのやふ魚志依きあとい寸

寢ふ多鞋をとりけりこ杖と並くと相書ありて

し年 多しぬ笠名く多鞋をたありて

貞享二乙丑行身山家三年城越ありて

誰う婿そ蓋菜と餅や入りしし年

或人の許より

旅のしん古菓を梅にありしけり

又南都の出入り

其の色や名もあき山の物よりみ

たふらば七重七重伽藍八重梅

二月堂ふ花り羅索院と号

名取や氷の僧は皆乃おと

在原寺石上村在原山岸尾古依り在原寺と云

うく心き残魂と眠るを梅柳

まより里深きと里三軒秋風く鳴籠の山家を訪



梅多し一たのしや鶴をねまきり終し

伏見西岸寺 浄土宗三聖堂 任口上人草庵の心

我衣より伏見より 菫花志月くせよ

大津より人と山路を越

山路をく何やらゆりし 萱叶

は時堅固の僧子那 本橋寺号 蒲苗坊 大津尚白青蓮門人 青蓮の年号も 近江村とて

大日枝や一と引換し一かきみ

かきみれの松たむより松不語よと

水とて流るよ田友よまきり存命と悦ぶぬひ

いれちよふ川中よ流たるさくくかき

二月盡又尾羽れ菫花よと相葉の家をまきり 遊仙有 草庵三 歌仙と云 笠

寺に訪たまひ

笠をよめぬいとやもまきりぬ

笠をよめぬいとやの言よりち号轉輪山就福寺と云親吉の靈塔笠を召するゆ安乃本 係ありゆ名よまきりと若くく取ありまきりを名

四月のはしめ豆所の素門はあひて

いととも小橋まきりよと草枕

こよひ相葉うけよ東よ赴くよりれを告めむ

牡丹葉ゆめくかきり輝け名残の心

まより甲州を經く

新駒はまきりちむやよりか那



日月未東源川松風別墅と誇りたる人

夏夜いそそ風哉西流くまは

伊勢北風瀑を送るるひ

まきれはと佐和の中山よりまきれ

冬草庵の偶居一閑居の歳を作らるひて

海の免をいそそおれね夜の雪

乞く喰らひ喰らさく喰ひさすは年終るをいと詞きあて

めぐる人か数も入らん老乃言

貞享三丙寅行年四十二源川に在

伊勢の賣家よりあつたる代の春

春風の常もいまの乾くふ雪かやたる草庵の閑ある折うらむ妙なる  
人なれりて

古池や地飛ちむおれおと

隨庵の僧宗波旅と赴きける哉

古葉たけ何れあふくきとけりし

春の日集成反四月常陸御所の本間道悦

号自準貞享三丙寅初懐筆 百軸と云の門は今若きまひりし  
起信文貞享三年 丙寅四月十五日とあり 冬まで源川に

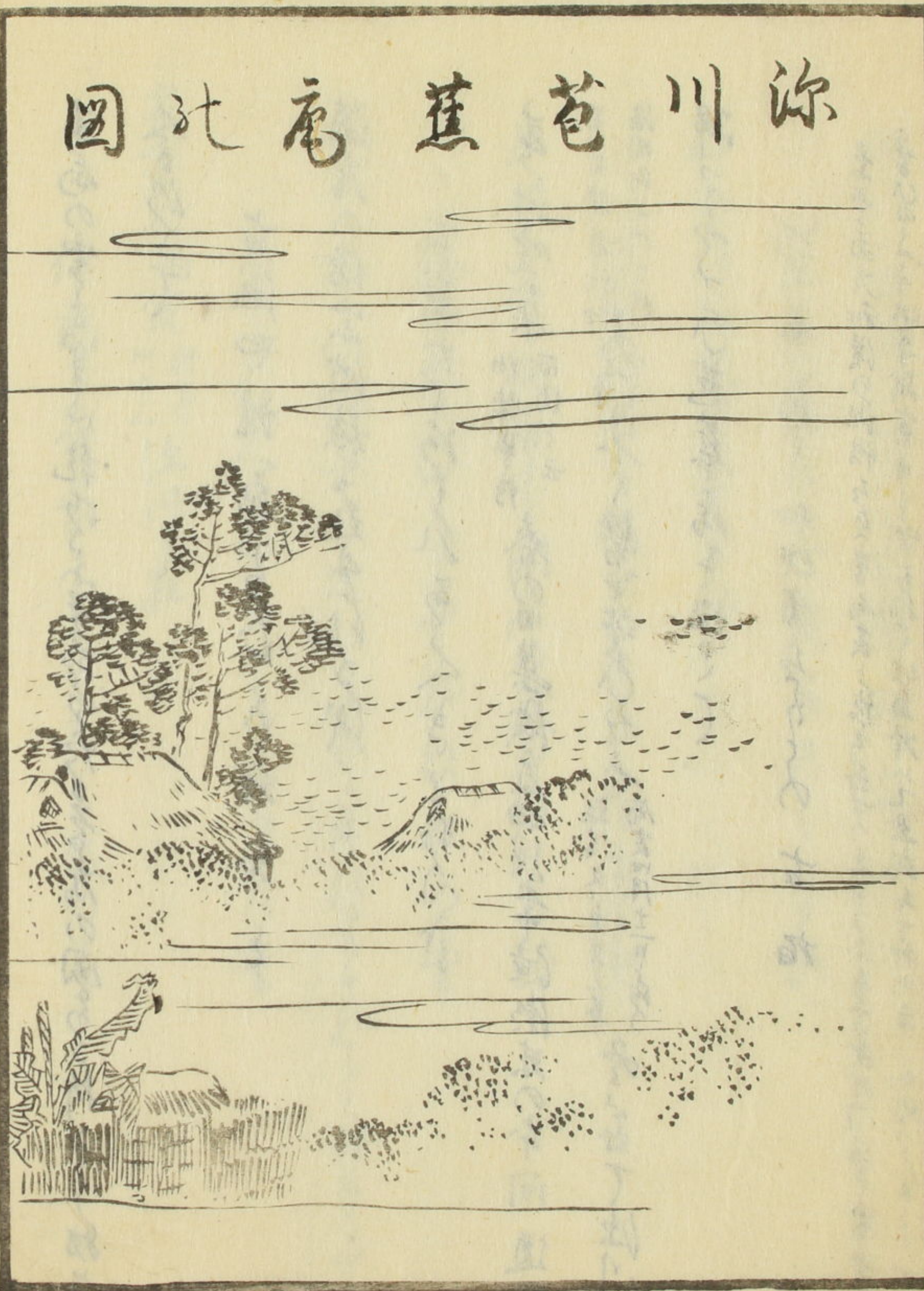
歸りしつゝ芭蕉庵を化して

阿の巻たけくおは男なりとの古栢

素平と為る和漢の飛信は貞享丙寅と信と云せり云うふ有る氏の門に今若きまひりし  
号ひりしは年終るをいとすあはてはる冷は乙丑或は丁卯の年と云はる人あり四月



源川芭蕉屬此圖





五月の以留葉を多むひのひと六月地凍の以を未武より和漢の遊語ありて又替りたり  
漸息するれはつとわ評あり又云未武ハ号あり表海東を俗名山に在る一説を以て  
博覧の人又此地を多す徳有葛師在り其地の立句を  
破風台より和也と云る夕まきみ 一解

月をまといはさるけりし 一年の昔

貞享四丁卯

行年 四十四

深川在居嵐雪

号を平居又稱古華 俗名振神言古傳

う小袖をまのりせし

成やうそ 羨ぬひて

誰やらか姿よりけりし 能乃 甚

病ふと何りて居る籠りぬひ

花の雲鐘をよびけり 浅草より

四月の初め其南より舟の追着あり

舟の屯も母をさるるそすまはしき

盆氷亭より遊びて

雨をりりくおのり今やけき早苗うね

初秋納涼の夕嵐を雪う並賛哉此まれのひく

阿さうかお下手は去さくあまきあり

八月唐島よりりぬ

唐島 紀行

曾良

俗名河合 想ふ所

宗波を待ひぬひて門より

舟は皆の徳をわると舟成あつる八けつと鐘くかきぬる原を道利根

川の急る布危と云ふ者あり漁家やうを救舟より下して唐崎山の麓

根岸寺佛頂和尚の許より人をして深首を裁りむと云杜少陵

の句とのりて

寺もあつくまきと詠ふ秋月尺その那



月を也一梢をぬれ持たさう  
神前より語りひく

此松の實をえせし世や神の林  
回家を道なき

新うけし田面の鶴や里の阿き  
跡は子や鶴まうけし月夜に

潮来は自準亭に到又部原を多とらふて  
萩原や一敷ちやとせ山はいぬ

八月下旬江戸より又十月古郷へ赴る  
旅人と我名もなき萩一統の時向  
行展紀の又  
芳野紀の云

露沾公 号遊園亭名城  
同為屋より 又其蘭亭にて鶴別の舎に望遠及て感のいかに松を裁く

一尾松を志らうと 雪うさ一乃雪  
鳴海より

星崎は雪をいんうとや 鳴子鳥  
本陣寺島氏業言亭遊ひ飛を舟雅章つのか歌と和して

京すくちまうとまえや 雪は雲  
被治出雲守氏玄亭より

おもしろし雪うさや 鳴子鳥の向  
實照庵和足亭 酒造家作  
分代名と云 又能譜阿のよて之河國保美村ふ杜國の

五けふ旅訪人と鳴海より廿五里中を流陣池下は茶店と休らひて



松葉焚くも城ありて空さる

越人

越智氏或人云  
北法皇の臣士

と俱に吉田の跡をわたりぬ

さされと二人旅宿すたのめりき

河津川 繩子と過

まぐみゆくやるよき水も流るし

保美村に杜國を過る也

麦もさへくよた隠き家やまけむ

さ終るよそ暮たきまはれぬはる

又尾州に往りて杜國同傳して伊良古崎

杜國平  
尾州あり

瘴ひと見付てられい古崎

越智の法で長修履の成就たるをねたまひ

磨石を鏡もまよふ雪の花

多度の権機と過るよ河津川

宮人よ我名越ちて落葉川

名護屋の人よ遊りて終るも休是等歌

いとゆきも雪見よ轉りて交す

防川亭に遊む

身を探る梅もむんす軒端の春

又杜國の伊良古崎に居るも中河の人の身を取はくもひめ

雪と空今宵所を此名月夜



此間流州政阜大垣の人來く俳諧あはれしむ所を十日の早を告  
登とせく回里ふ赴きぬし

旅病してらんや浮世乃煤をく光

葉名哉過日永里ふるとかると杖突坂むきけり命に執打とのとて  
るよるとるゆし

からねふ杖突坂を為馬のう那

古郷に帰る

古内々や箱の緒に泣くよの暮

古内のはつせきと五原と稱すとも此を所謂再形居初名無名居藁原居  
龍竹居本藁原居西藁原居是なり

貞享五戊辰行年四十五宵の年宵の若狭をくまんと回友其りて酒と舞し

元日病忘るるれをとげし去有て

二日少もぬりうをせし花の表

風麦亭之遊

たろくまをくさく九日は聖山うれ

山里を菊菜おそし梅の花

卓袋亭は月待に招くをわひ

月さちや梅くさけゆく小山伏

山家に遊じて

多よ白く石炭ほく玉の梅はむ

門人猿雛依名對しぬひて



わろく けろく 詠柳 ままらひ 魚

或人曰は名の自 宗七宗世を侍い河波底復峰山新大佛寺 後宗上人周に信基のちうり

結の懐旧の情を述く

丈の陽実台 一石はく

伊勢宿山田信く空司梅を尋ねあひ 一子良飯の内より信

ふらふら信ひく

梅の花は一本ゆう 梅の花

二月十日阿久神踏山とある福小西行の涙を志し増廣は信を悲し

むとけり 善あるとて

何れ木の花とる志し白むう野

をたふむをさく夜更名のりししん

十五日外宮の館とて人愛ふありて

神垣やおもひとけり 涅槃像

菩提山神照寺

山寺は出さつつけし聖老は李

綱代民船弘氏の男胡来 一本作う許ふたすて

梅は木の梅やうり木やうたのちれ

二葉軒談訪のい

藪柱門を厚のわりの葉と那

龍尚舎 神藏く龍尚舎と号す 持字の人為舎表は之 一連



物は名を先とし、秋の若葉の那

又伊勢の海にぬく上野葉所寺の初會

初梅折し、さきやたふたりの里

藤堂探丸 新七郎良長と稱す 成長の浪芭蕉翁の宗房なる時其忠

首と奥の別楚の花を稱して招き初と對面ありし、只いむ出せ

初めは互に落涙難刻の後

さあ、さあ、おもしろいおもしろい

春の日をやく草うらむ色ゆく 探丸

さあ、さあ、おもしろいおもしろい 蕉翁の糖草にて従藩一坐たりぬまを、孤竹庵

宗立亭の敷日おひらむて

花枝宿しをくぬ終りやせりやと

はるは花をれいしその色う那

芳野に杖を曳同伴社園 自稱芳 乾坤を夜同行二人堂は葉をよみ

芳野うくゆらぐんせうり 梅 笠

大和の國今井梅舟と遊ぐ丹波市をよ

草外くゝ霜かきさるや夏の花

草尾村

花のうけ後不似て旅あふれ

初瀬の観音は靈場

春の夜や翁人ゆらぐ一葉の隅



葛城の麓を過ぐ

花をあげゆく神の歌

三輪多武峰崎峰

雲を穿つてゆく体と一峰の影

龍門の滝

海飲まわらんうた龍のむ

龍門の花やと居た土産よせん

西河の滝

ほろりと山吹ちるを流るおと

結城の龍布留の滝一尺一尺の芳野の花と日蓮留るまで

天下はありと歎息ありと西と人の田に苔清水

甚るの木下ふはつと一帯の那

凍解く草の波を流す水

夫々の河を流す紀伊高野の野にあり

父母の志きりに急ぐ龍の影

新喜と和歌の浦まで過付る

紀之井寺より龍の湯寺

むと川流るるしるおひね衣と

南のうらまのひこ

龍佛の日ふ生色河へ流るる



招提寺の信鑑生和尚 沙石集の唐の龍興寺は鑑真和尚が唐武天皇の唐宗聖  
朝に東へ南都の南無堂法西の観世音寺中興の某師寺との  
戒壇を立しん云々又一布は法王寺の法度の  
難風と法目言うせむい」と云 此像をねらひ

若葉のてし青目のあつく城をくや  
旧友と別きて

唐の角先一畑のそのつ流り那

去芳云一年古木の法海寺の太子は聖徳太子其の太子冠とんるしつとよしの并  
帳の赴ききしつりしつこのはふらうもつら

まうの津は國を越く大坂をぶらひひて  
うたつてもこのるも梅のむしりぬ

源麿の浦を二尺して

月をあれと留まればやうら源麿の友

おもひたるわくいしよあのみうやと書ひて

鴨牛角よりくけよ源麿の石

阿のくは夜泊

峭壺やをうめき夢城反の月

鉄拐の峰をせき

源戸の海士の若先う啼や都に

ほろとたを消ゆる方やあひし

源平は其代を頼一浦のあふくを志るのひ又終焉山城

名山崎の宗鑑 俗名まがね  
三郎範重 の旧跡を訪

有るたさあまをうらんかきほろと



大津に越く本曾路に趣んとしぬ

是れより田舎六月よりくく魚の舟

祖翁の日記 自筆一冊 六月六日大津と出る川上七日赤坂之宿

八日岐阜より秋芳軒直白と云ふ寺と云く稲葉山の松ヶ下宿

小長途の旅愁を慰めぬ

山之けや乃紙巻人ぬきけ

人々にしるゑされぬ岐阜に鶴岡をのりぬ

おもひろくやとて出りき鶴舟の如

又たふひをくく此川の年急能

岐阜山より石

城ありや古井の清き先同ん

は折りし庭梧の少年流ししなつてを悼むぬ

と流き人よあそびん花も夏野に

長等川の階なる賀嶋氏の水橋を越え記を去て十八橋と名付

はあつる目こころゆるもたれ流し

桑門に百の許りなりぬは僧あるは地こころやせしるこれハ

やとせし人蒸れ杖よりあるりて

杉野休業軒長坂の宿を訪く

粟稗よりくくく草の宿

田中法花をよ信ぬひて



新住や子猫かしのの晒乃奇

大層根成就院

何より此見立よも似き三日の月

晴満と程のひて

初秋や海も暮田の一みとる

知是る才金傍のう新宅を管

よ此家やまき地よりこへ菅戸の粟

はあよ一日遊ひぬひて撰題喜甄を得

夕顔や秋をいろくの瓢の那

名護屋小入那ある旅行を送る

見おくるよりしるやさひ秋の風

或曰は古集  
所見なりと云

八月史料の月見と旅立ぬ同行越人

史料  
紀行

送られつおくりのさやハ本音の秋

今廓お送る三益をかきとる

朝かやち酒ものささくわうりうれ

荷号

号種  
本堂

の僕と涼しく行路を助く棧をぬぬい

うけをよいのちをかむ若いの月ら

痛免や道標のう場なち味あふ四十八をうと越て娘捨山の月を秋とぬらし

付や娘むしり位月乃友

善光寺



月影や四門曰宗も只むと川  
吹飛せ石を流るの聲を聞く

越人をしていづくに戸も満りよ  
越人といふ所の能楽あり  
あつた所集り又

箱の自書は白竹林の月夜玉級の望遠山よりあつたあかき  
竹ありこれの目よとてあれをたのむ十三束とてあつた

木石の産物もあつてあつたぬと后の月

素雪亭菊園の會もなれあひて

いさよひのつらきうと物よけとれ葉

源川の草履も閑居にて

枯枝よ鳥のとほりたり秋乃葉

或人云は向正堂在年と前記の言を據るに記云葉とてりといふは後葉等とは在位記  
代過るとしてとてあつた

雪ちりりや糖屋のききは前の一

と云白とてりといふは然きとも翌年夏のけそとて去年の秋江上の破屋と蜘蛛の古葉  
秋ちりりといふは前記の糖屋とてりといふは八月の源川の草履とてりといふは  
出た糖屋とてりといふは前記の

元禄元辰 九月 行年  
改元 甲子 源川在居

冬就と又より源人はさくら

物うさを誰ねあそ片さくら

去年は健宿と思ひ出く越人消息は信ふ  
杜國茂信上の越人を信せられ  
たきとあつた

二人見り雪ちりと年と降ける

盗人の河ふと秋もあり年の暮

元禄二己 行年  
甲子 源川にて暮をむくぬ

歳を過すとふきとて民や庭に







本家も店も破らぬ夏木立  
高久の宿者佐名楓南無家又飯桶のひて

落来るや高久の宿者佐名楓南無

殺生石

石は高や友州あく石路若し

芦野に里遊行柳

田一敷うきくまう柳うき

白河の突を越阿武隈川流るるをけ沼を流る杉岩漱郡淡賀川

の御等所号作年高保品伊太衛門う許よぶる

風流のけい久やあくの田植

四五日止の素門の仲う軒の聖は祠を虫のひ

世の人ねん付ぬむや軒の栗

等形う許を虫の櫛は宿をたぬを安積山二本松尾塚の岩屋

を二尺一ヶ福高の舎を志のふりまうけ石を君

早苗とるるまえやむり志のふり

月の福は涙をもらえ瀬下るる飯塚の里鏡野の佐友屋司の四

蹟寺言の精舎号王よ今義経のたふ弁慶の後とる人のひ

箱も右刀も年月のうれ紙織

甚お飯塚やとる素折終るる伊達の大本戸と誠一鏡摺

白石城を道兼輪並高を志のふり



笠島をいつくし二月力ぬりり

岩沼泊武隈の松

橋よりとねを二月哉

名取川をさぐる仙臺入四日逗留  
一舟小童工加藤の  
目より此國に草鞋を贈る

阿やめ村是しむきとん草鞋の緒

玉田栢野つしう岡蓋師堂天神の徳社奉ね  
おく此細道乃  
山陰をたると十符の蒼とんあひく  
市川村の多原城を並の研とん  
燈田の玉川沖の石まね松山を過く塩竈を余り  
紙求め社以の社歌  
目をさる一泉之郎  
名忠衛 秀衛三男  
の忠勇を感一松島を渡り  
二月十日瑞岩寺小

訪く十二日平名とらるじ河ねを松張るの橋をさる

石れ巻り出金蘇山と海中に泳めやとて袖の浪尾をたぬき  
の萱

原かよ余ふんはしをるる舎り平名  
秀衛 康衛 の旧記  
よ新の高館  
義徳の 旧記

夏州やつとりのともこの夢の松

二月哉ね

又月面の降張りや光りて堂

南部街道を遙く人やと岩手は里に泊り  
忠徳と川のふらふら  
道よりこれ湯より原前の雲より  
きて舎りのひ

帯志しみ馬は原をさるる元

出羽國に載りし海とふ人記されし  
て嶺峯の地あり  
元と記



尾を遊の法風 録本 家と云ふ所のい

源一と云ふ系ありてあまうま

眉掃と傳ふ一とく紅のま

山歌飲の立石寺 号宝珠山在屋上中所有 筆所意是古所 深基 城ねんと七里斗を飲酒りて

かの精舎と云

志川うさや岩ふまて入輝の考

新庄の山歌阿風流亭 流流 あり 最上川を流らんと大石田の二葉 播磨守殿 平在考

宅日記と流く 流流 あり

さみんを流らめとや一最上川

此度の風流はあまうま こてんをやま板敷山志と云の流仙入中との難流

道く六月初羽黒山の志と南谷の別院と舎別當會元念法ありせらる

有かや雪をかきりて 南 谷

流一さや平は之日月の羽黒山

八日月山の流く

雲の岸ゆく川端をて月乃山

湯殿山の流のい

流らきぬ湯殿まねん袂のり

遂く二山を流て流ら雲の城下空行 志山 氏 家と舎りたまむて

臨り一や山を出羽はま川 茄子

又もふ川をのり酒田より合道 播磨守殿 氏 流らふぬ一六月十五日也



暑きり我海へ入るる暑き川

不至

号岡原依名  
伊豆元明

う亭に倉袖の浦の眺望

河の山也水浦うけく夕暮

山さま一礫を伝ひ家湾舟流く之を

象湾や雨の西施う福ふ乃を

夕暮きやさくく源心信のむ

又より北陸道に杖を曳加賀の府まで百三千里氣の果を越せ

越後の地より越中北境の市振に候る

此等九日路暑海より  
今く文政紀に候る

出雲崎の倉

あゝ海や依渡り横たふ銀河

直江津北河の寺の舎りぬ

文月や六日も帯は巻く似人

高田より留師細川青房の亭に遊ひたす

業様よりきのを那を草枕

新譜

海に降雨や急き深き舟

或人之は向山  
不知とあり

親志の伝子らに大慶の駒之へ一歩と云は國一

の難石浅路く舎りをぬめぬ

都の川家より遊女も病なり萩と月

又早八瀬といふおやくの川を渡り那古は浦を掲露の差浪

と余はる尺く加賀此國に入



早稲の香や月け入右なる磯海  
舟の花山徑利仙跡の苔

くろかきや三つひ起てさ落しあり

或人云は向  
西の山と云 金澤の先一葉 お松氏稱  
墓の信

塚よりまけ我位をうた秋の風

小春亭の遊ひのし其容態山海の味をほらぬ吾友をわづらふ也  
其次の和は合わ海野川下り一葉落しありと容態を大いりて見  
わいて只吾友のこたへ

まゝ一葉のさひし味をこす秋を

一本は左程のみの亭  
と云ふハ誤あり 舟屋の柳渡軒向空亭の遊心

散柳ありし我も轡を脱く

少幻庵の遊蹤借あり 其竹の句抄若き  
と云ふハ誤あり

秋まきし一葉ありむけやぬ茄子

小松より

志ありし記名や小松吹き林まき

観音亭の遊

ねむるゆへ人なきかや雨の森

太田の神社に宿る高友別當実盛ら甲冑と刀のり

阿春むきんや赤胃は下のきりくす

此句は  
二葉首と云 山中に温泉の行く



山中や葉をまきしぬ温るおひ  
志しねと寂とゆるんあー那岩の観音をねして

石山のふらうり志路ー林の風

此源首良お病むとく先立て勢州へゆく

くくくくく書付消ん笠は露

大聖寺の城下金昌寺一翫ーあひて

庭掃くくゆくや寺まらる樹

越前の境吉崎村入江と舟楫ゆく河越の松と尋ねる天龍寺とあ

門へ入る藤鉄と茶のふらむくれ

北枝 此の全篇の在任地を  
北枝に在る為の合あり 北と送るなる松雲の茶店と別と送る

も北書て扇引きく別と送るくぬ

笑くくく務ふぬむ心出まらや  
北枝

六十町山へゆく永年寺と礼福井とあ等載を尋ねる

名月北見不同ん松おきん

我人云は向  
玉人云と 但し数度と赴くは那言言あまの橋 橋のついで 玉江と尋

あまむらや月尺の松のぬくぬき

月尺せよ玉江の芦張州お光

雪の寒湯の尾峰より懸る城と追のよ

月と名をつみあさてやいとの祢

義仲の爲覚の山と月おし



春比の明神と秋集りて

月清一遊仙のまじり砂のまじり

物まじり遊仙の教習の清き月と人たまひ

君月や北國日和定らんあき

清き時と舎のひふまの物語は清き時沈んで宿を國はるのきと今君を  
いと龍臥下まじり遊て引揚ぎたりのまじりまじり

月い川と鐘を沈み今海は底

種の深いはれ清く遊んで

小秋ちきます月の小貝小盃

まじりまじり源平の孫とる深なりは

史より長波國の紙のよき長越人申途まで出むて九月三日長波の  
あまの宮とまじりまじり中子伝通前川前には父子斜嶽をまじりまじり  
まじり旅愁とまじりまじりあまの別墅

鏡り居る本実まじり実捨まじりや

本因亭

隠き家や月と尊とふ田と互

斜嶽亭と遊ひ

其まじり月とたのまじり伊吹山

伊勢此近宮をまじりまじりと旅立ちのまじり

秋の暮行先くの遊座より解

本因



石山北夷位圖



石山北夷位圖



石山北夷位圖



萩の編やうう萩の編やうう

同六日本曾川と小舟をて下る

蛤のやうなやうなゆくとあきそ

内宮の事とさやうな内宮の近宮とさやうな

たうとさふれおあひぬ所近宮

山田とあう中村と云ふと道

秋の風伊勢の差原猶島

又云う家とさやうな其妻のひくくは感のあひて

月さひよの明初うあはあしとさひ

立寄れば伊勢の長尾味と越へたさふれと赴けり

初時雨懐も小藁を掛けけり

さう雪やうの大佛は柱立

まうと路とさやうな途中

いうめーきさやうなれの松並

玄来 俗名向井 平次郎 の落柿舎とさやうな祈りとは物とさやうな尺牘を以

とて秋事かたけあひふ曉とさやうなあしとさひ

長唄の境もあうとさやうな辨とさひ

猿月とさやうな赴けり

何とさやうな師老の市にゆく鳥

元禄三庚午 行年 早七 都道とさやうな去とさやうなと相とさやうな



誰人の菘葉をいよひ花にま

又伊勢のあして二尺の園を相いぬいて

うたのうき源のむも浦にま

踏字亭の遊ひ

衣のぬきも折んぬり花

園女

若師 西館中 徳名  
一有 表後 大坂 住 彦

亭の遊

暖簾の折くもはゆりー水の梅

伊勢の海と花垣の庭とをい

一里とて花をさけ子孫のや

本白亭

島打おとやありしの梅麻

着堂喬木亭の遊

お手に松花や木深き殿造り

又近江の立紙古津の珠碩徳四の洒落堂の遊と其記をまのひて

四方より花吹ひく鳴乃海

木の布にけり籠もさくかき

孰集城湖あり徳を情表とけり云ありて

新集城ありみの人とさみたり

夏四月初に石山に奥國を宛の幻住庵を築ひて入る其記を作して

先たのむ推の本のりやと云来立







鏡明て月さしひよ浮御堂

既世の  
機あり又其原堅固と道色しひて

病層の夜きよなる旅おくれ

海士の家を小海老交すいしよ

醫所未既の許しひきゆるをひひふ管意八端をき次とらん

煙をまきく能と吸草の能く那

大津の丹路

俗名ある馬  
能くまき

亭を遊ひのひし骸骨との留致をかん

く能くするはまの思く舞臺の隆よりけはと海とよ生るのたふり

かふは遊了ことめんやふに燭精と抱て終よまらうつとわく

はるも只は生るよとあまきくりのありとまらうつとわく

いあつまやうるは雲をききの種

無名層の因居よ乙州

尾野月  
のり

二橋と携来つり時

叶は石や日るくく巻一層の酒

李由

江阿重因の照思も蓋  
耶執又社累年四様尾

芸林の二人對一

世菊翁と梅とうれしき草の層

流の雲竹

俗名はる  
ハ流尾

書家也自画の像と替とてまきれひて

あらしむけ家もきひき、秋の暮

冬京よ起る大津と道く

三尺の山とあらしの木葉をりれ

所壺の別當景概丸う行と遊







正月十八日吉良の落柿舎より暫く止らる其原を記す 小智の屋敷を尋て

うねりや竹の子とあか人乃一果

落柿舎頼破とけり出ありて

さみ多きや色紙魚きたる壁の柱

袖のむよむりと思ふ料理の石

六月四日其妻と出ぬし回条の川原純涼よまこりて

川風や落柿舎より夕まきみ

大津よ玉丹楚亭と遊其家名と称しひ

ひりりとあたる庭や雪は春

蓮のまゝ目と通すや西乃鼻

其母より御仙亭と招う終

は病を多病も志ぬ麻うね

秋落不うま心秀号志 竹堂号志 亭は初會と招われぬ

月代や猿よ多紙おく宵の翁

堅田の森漱可休亭

祖父と親其子け屋や柿の町

石山より信ぬ

檜樹は志のしる月の名残うね

落石の曲翠号志 外紀本多原長号志 亭と遊

乳麵の下禁三秋夜寒かき



冬末武王赴人...一石月の亭曲...の海...  
冬末武王赴人...一石月の亭曲...の海...

たふと...の海...  
たふと...の海...

百年の...  
百年の...

流州...  
流州...

作り...  
作り...

又耕...  
又耕...

...  
...

大垣...  
大垣...

折...  
折...

斜...  
斜...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...







於風松風之情を刺す住居を昔良代おもう物敷家さすひさし月  
のよそをひさして芭蕉五のれを裁す

せしや浅草をねるのけん唐の月

芭蕉歌  
橋中河有  
九月浪舞は酒堂津川より舞う能楽あり  
是と津川  
集とよ  
支那亭

の口切を招きて

口切の唄は庭そま川より記

許六亭の遊む

わささのり人よ年よ色初時雨

素堂亭年志きの會

昔多しと在の笑よ出立ころれ

元禄六癸酉 行年  
み十

元日お田毎のりよと意一けき

僧雪冷く旅よ出る送別の群ありて

鶴の毛は馬き衣やま那の雲

露沾らよるきて

西村の唐もゆき藤むの庭

友許六より別す時  
送別詩有

推は花の心も似よは春の旅

又流川へやわらる

又月毎よ鳴れ浮葉をるん



秋軍閥の説と作らぬい

朝うもや昼を寝おろそ門の垣

七月七日の夜西星とあつきて

高きあまの星も旅病や岩の上

源川の末末本松の舟きりて

川よとは川下や月乃友

門人松倉盛榮

板倉屋の長  
八月廿五日卒

う涙と出ぬいて

秋風乃折くおろき葉の枝

初七日其墓より結ると有て

尺一やそは七日を墓の二日の月

東順

吾其角の父  
表は 赤子

う情と出ぬいて

八月廿七日に机に四隅う柳

盆水亭より遊

秋結や葉は雪のまゝる豆齋中

八丁堀より

葉は花さくや石屋の石の石

大門通りを過る頃

琴箱や古物店の省戸の葉

小名木河の相葉を指しぬいて

秋は流るる行もや来らぬ松川



十月九日素堂亭より茶園の遊有

茶園の遊有也庭よりききたる履の履

菅沼曲の旅館と訪る

埋火や登りたる客の影ほりし

茶園を去りて旅館と茶園とを尋ねて

八丁もけぬの大根のうらな

有明も三十日ふ近し餅の音

元禄七甲戌行年  
六十一 源川左唐

茶園の遊有也庭よりききたる履の履

上野の花見よいとめをきかひて

四つ又茶の掛もぬもんころり

本徳寺にて茶摘とやふぬ物

子冊亭の掛もぬ

宗陽寺や敷と小庭の別坐敷

松隣の新宅と負し自画賛を贈りぬ

茶園の遊有也庭よりききたる履の履

炭俵茶別で茶集減室又月十日詣り赴り甲子結ひ源川の唐

正室二つあり  
同元禄六 茶園の遊有也

茶園の遊有也庭よりききたる履の履

此時茶園の乙州の家より三つと訪るぬいし乙州をめぐりて同徳寺



名残惜けし足ゆる別きて東海舟を經ぬ小川崎を船て送るは今小野

麦の穂をちりちりふつちむ別きてくれ

晴日若根の葉を越す

目よかぬ秋時や群うらみ月不こ

まらるる路や魚橋も榮れふあひ

大井川あきく高田の御舟家も送る一舟

昔はよりいふ葉あふに茶子汁

さみくまの雪ふき落せ大井川

友は月津油より出て赤飯や

尾州の若く名護屋の若く草履と藪子二日送る一舟交の人を對ひ

世を旅う代うく小田は新居

野舟も居けるを訪

涼しむる指圖も人ゆる信むう那

美濃も越く先小田の舟由の方一文を贈りて

魚舟もひるおせうもれ麻乃山

大垣も若く玉田氏手川も日光御代末も信存もつて送るゆふ

川原の露もこのさうりかけりなれ

蔵田氏も遊る

葉つけりるは扇りや田植漁

又名古屋も取てうらわな小野川も舟佐若く送るゆふ



徳止山因氏素淡亭と飯橋一乃ひ

新鶴ふくと人の心とや佐谷泊

出よ伊原の越え上野丁雪笠

山田平吉清  
箱の住人

原松と栲とと尺のひて

一説は自裁のひ  
とよひ

源一とや直一新松乃枝は形

源一とや直一新松乃枝は形

東路は毛膝のひかへ麻とみ

新松乃枝とや直一源一の泥

那明亭と遊

源一とを信よらへけを嘆哦の竹

人々ついで居て所の名不河を云あつ中一

所の波むかへ交や蓬臺聖

清洲のあ波とせと心右

と云即時の句と題をまじけなむと云ふは  
持らぬと云ふ

小倉山常寂寺と宿

松林を月めとや空のかさるる春

六月や峰と雲おく岩山

清洲や浪よとちり也青松葉

竹と道色一なる門人之道

後更紙行  
浪華お人

と對して

我も仙乎二つり割と茶葉の



は浪きつらくは考ふ東山の草堂号茶遊ひのむくは岩像号茶

胸らう時宇治山伏見は里淡路くゆり終らば年ハいつともう

逆るくは桃尻ありと愛ひゆむ程ふは曲葉う許うきてまは(納涼)あり

夏は秋やくつきて時一冷し物

飯阿くく噪り馳走や夕きくみ

は句納涼象  
納涼とあり 同不遊力亭と遊む

さく浪や風の薫りはね松子

湖や若うけ惜む雪の岸

大津うぶ木亭号茶

秋ちのき心のうらや田舎半

秋無花居る物ころふ

道細く南力西州の花の露

文月の初又木亭亭と遊む

むらとと壁をうらうと屋おくれ

西粟田司喜名居る  
の句作さうく

は以何候と見松尾の許うは消息有て旧里を胸うと盛ん會ひつと

みたまふ喜名新と巻渡院と云

家らとれ杖よ白髪乃屋まあり

藤堂玄席子は庭つらむとんぬい

風を也志とらうと極くは庭乃と秋



七月廿八日 葦原亭 後継 遊ひ 龍宿有良庵と山家と遊

名月と葦原のきりりや田は曇り

名月ありを那うしんをて 輝烟

十六夜を葦原亭に宿りぬ

今宵 惟より一 名月十六里

片野の望翠亭

里ありて 柿の木わくの家のり

は須ま考伊勢は 後と徳山屋を 行をけるに

葦原をまきしこととて 山路は

まふま考 惟然とて 大和と 赴たきし 九月八日 葦原

木津川を系 跡同波にて 舟をより 葦原と

葦原を や 葦原より 古き 佛を

葦原の 香や 奈良の 幾代の 男を

猿渡の 逢ふ 舎を 求めた

むのと なく 尾を 名一 松の 庵

葦原亭

葦原を いくし かに けり 葦原

其なり 大板と 葦原と 奈良の 難波の けり 吉原と 葦原

と下て 雨の 葦原を けり 都は 地を 八ヶ 食の 掛は

身を 見せし 八ヶ けり 葦原の 歩を 葦原の けり



暮らきく奈良と難波の宵月夜  
浪蕪への心ひく人とはまきや  
静ある席よめく春を  
恒吉の深き心まきく遊む心

此秋を何とてしる雪ふり

十三日恒吉の市よりぬい  
る昼のそとる雨より冷  
け静あり夕暮るる思  
念ふ惱みぬい  
止亭より後ひお  
秋の月の名残を  
ほくの人恒吉の市  
いまを何とてしる

外雲てを別替る月  
足り野

此秋を名川畔止亭  
月夜に遊あり  
題月下送児と  
瑞雪有て

月夜や楓情  
う秋児の性

其折亭

秋もをわき  
つる雨の月  
の秋

廿一日二日と又車  
扇亭遊

秋の秋を打扇  
たる秋

おとるき秋の秋  
扇や亭

園女亭

志る葉は目  
とる春

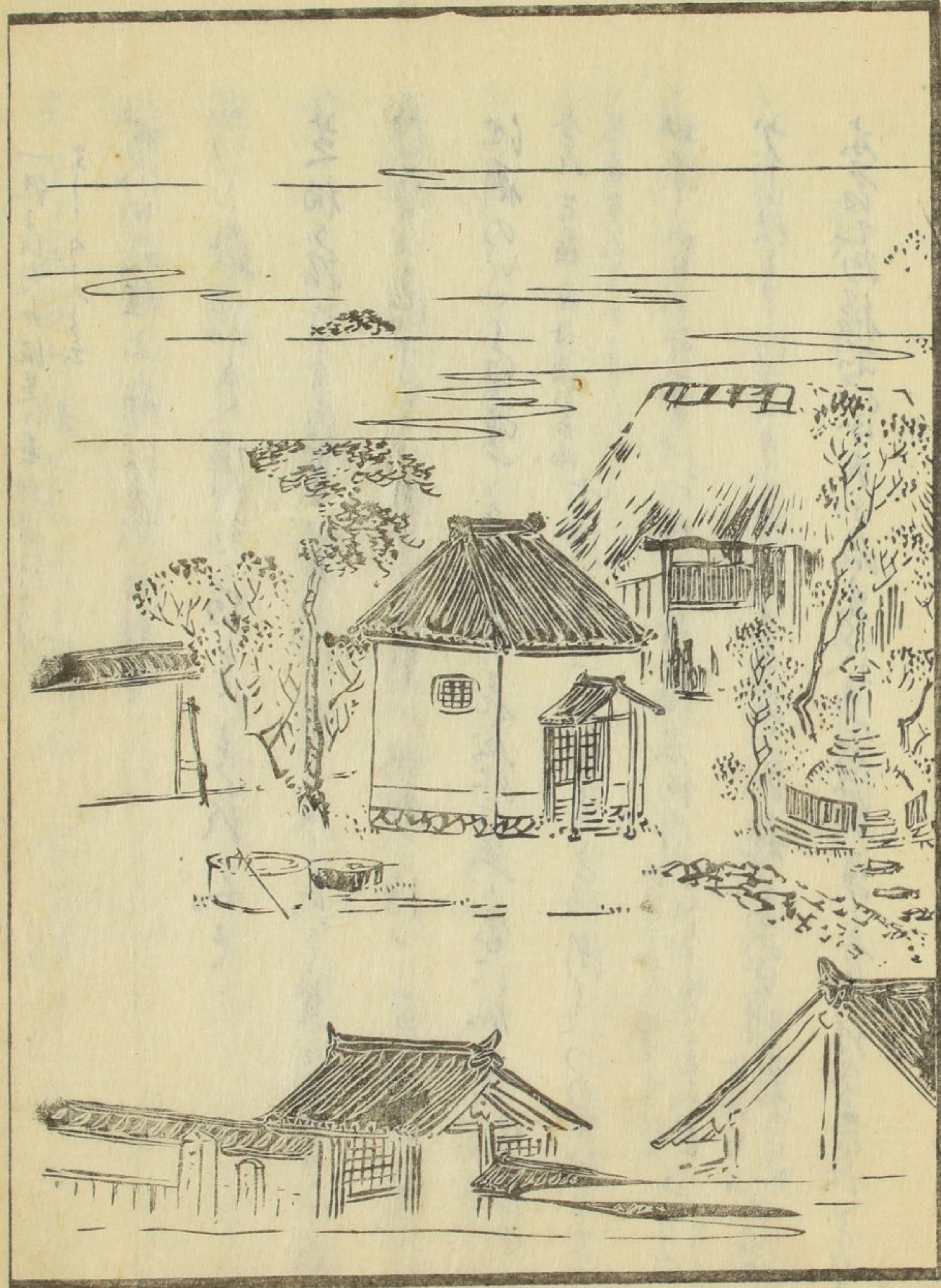
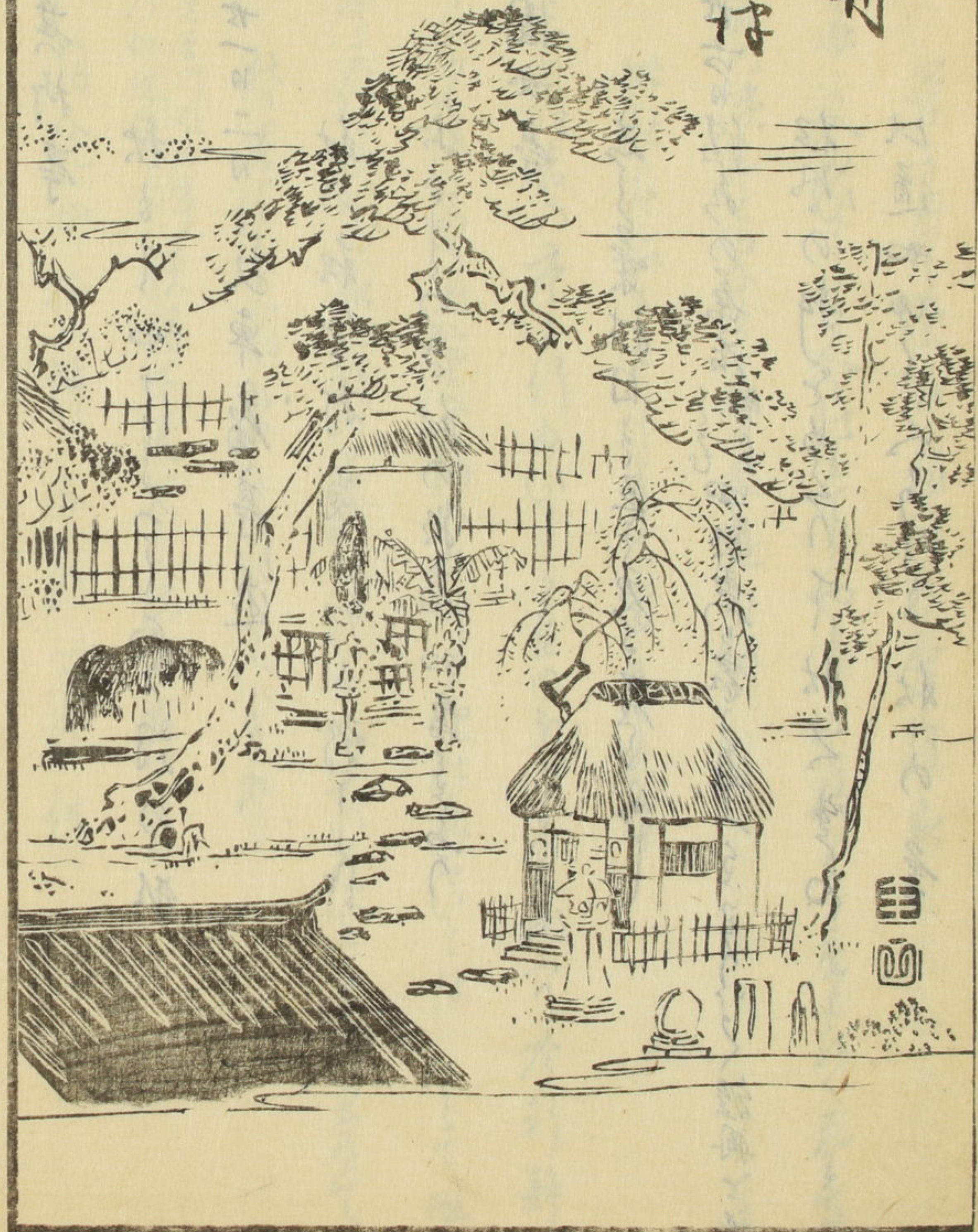
廿七日清水の屋  
店  
四郎  
家遊  
入る日  
はく  
羅丹と秋

秋風の秋を  
めりて  
秋

は道やゆく人  
あり  
秋の音



江村 雲村 義仲寺北園





一説は向を流るる其便甚うなりて  
あしやうと云

廿八日又睦止亭に遊ひぬむて

秋涼き隣を何をもたれんそ

芝柏の招きも思ふは数句をきりてされく思ふを必ゆらん約し

たよひら園女亭は宮意の園に塊積り隣ると是らきりて廿九日

池柳のいさよ有て舟中花念仁在る家に休ぬふ  
此の着病の全書  
惟此酒堂之道

金程 菩薩 若舟 次郎 彦彦  
尾妻貞は子かあり  
十月二日二日の以る病漸くにつのりけるまふ

想て又日くわあれの人親友の消息あり  
此のまき遊里遊境の  
門人二十餘人なりと云 六日の以

ガ一快と申る七日小京より去る江州龍王宮の史料  
舟御の意  
徳田内蔵 大徳を

本意乙州船下れずあか若ある八日秋涼更なるを抱け侍る若舟と云

旅の病も多しを枯野と云

と云向と云あわし其後を来去考と云ては吟の可否と問ひ九月

病草ありけり八日一の文造物の沙汰あり十日の夕其南ある  
其南  
その時

若病草なるといふ人と傳ひを舟中一とてゆふ  
是等の大坂旅病の悩かすゆふを急き記すしと云 其夜も明る月と小本意と語し

やされけるは吾生れも何事も迫りぬを免ゆる也素るを水前を橋の

刃はは葉々の葉とて流るるうらうら星きりては只秋の老子に

葉とて宛秋まの唇を流るる源く頼る其流をた右の人談

返ける不浄とありし香を短く後安けりてそののひは十二日

の申は刻斗り候るましく近化るひを門人おのく涙もふき

あう其秋七膳を右櫃に入川舟の系十餘人送る伏見小



美岸寺  
此石田の李由りし其角よりあひを掃りて櫃に注ぎ其角極小の  
此言昌唐撰志を以てして信厚より何れより後継五芳年袋よりし  
皆之體よりあひを掃りて櫃に注ぎ其角極小の  
此言昌唐撰志を以てして信厚より何れより後継五芳年袋よりし

十三日遊菊小島本音塚の墓石房に入有りて十四日として埋葬し  
定心招きしを馳集る門業旧友之百餘輩也其像をいそみて  
粟津の義仲より收畢

石碑 芭蕉翁の之字

信文村の者也

大津北谷町

此石田五年廿廿難系村  
照川久太郎氏より買諸

和滿蒙藏

啐嚙



此石田九年廿廿難系村  
日魚氏 院 臨 臨 臨 臨  
枕流之 一 漢 漢 漢 漢 者也

岡野庄八輯 一具庵藏板

弘化二年乙巳春正月發行

本石町十軒店

東都書肆 萬笈堂

英大助梓

牛



天降抄谷町

抄酒藏藏